

## 地方の舞楽（4）

### 東北地方に伝承される《太平楽》

加 納 マ リ

#### 1. はじめに

日本各地に伝承される舞楽について、筆者はこれまでに島根県隠岐島の蓮華会舞（加納 2004）、山形県の谷地八幡神社と慈恩寺の林家舞楽（加納 2006）、平塩舞楽（加納 2008）を取り上げ、それぞれの概要を示した。今回は、日本各地に伝承される舞楽のなかで、特に東北地方の《太平楽》を取りあげる。山形県谷地八幡神社、慈恩寺、平塩熊野神社、宮城県名取熊野神社など東北地方に伝承される《太平楽》は、いずれも山形県の山寺（立石寺）にその起源をもつといわれているが、戦国時代の鎧兜を身に付けた武将の姿で舞うところが全国的に見ても珍しく、興味深い。この小論は山寺にその起源があるとされる山形県や宮城県の現行の《太平楽》を音楽や舞から比較分析し、東北地方に伝承される《太平楽》の特徴をまとめたものである。

#### 2. 日本各地に伝承される《太平楽》

《太平楽》は現在、宮内庁楽部や四天王寺でも行われており、宮内庁楽部では天皇の即位式に際して、四天王寺では毎年、聖霊会<sup>1)</sup>に舞われる。宮内庁などに伝わる《太平楽》は唐代の中国から日本に伝来したものと行われており、作曲者、作曲年代、伝来の年代など詳しくはわかっていない（遠藤徹 2000）。しかし、平安時代から宮廷で舞われてきたことは、平安時代やそれ以降に記された多くの楽書や文学作品などから確認できる<sup>2)</sup>。現在伝承されている地方の舞楽はこの宮廷での舞楽が地方に伝播したものと推察されるが、まだ、その確証はない。

一方、日本各地に伝承される舞楽の中で《太平楽》が現在も舞われているのは、山形県、宮城県、新潟県、富山県、静岡県、島根県で、その詳細は文末の【表 1】に示した通りである。東北に伝承される《太平楽》は大人の男性が戦国時代の鎧兜で舞う一方、それ以外の地方では稚児舞として小学校低学年の男児が舞っている。稚児舞は男児が顔に化粧をし、可憐に舞うものが多く、《太平楽》

1) 四天王寺を創建したといわれる聖徳太子の命日（現在は 4 月 22 日）に行われる法要。

2) 『舞楽要録』（平安時代）、『教訓抄』（鎌倉時代）、『楽家録』（江戸時代）その他の楽書をはじめ、『枕草子』（200 段）、『源氏物語』（若菜下）に《太平楽》の名が見られる。

以外にもいろいろな舞が各地で行われている<sup>3)</sup>。しかしながら《太平楽》のように同じ舞を大人が舞う地方と子どもが舞う地方とがはっきり分かれている舞は少ない。

《太平楽》の装束も、東北地方の大人の舞、稚児舞、宮内庁楽部それぞれで異なる。東北地方の《太平楽》では、男性が着物と袴の上に戦国時代の兜に鎧、手甲やすね当てをつけ、太刀や鉾をもって舞うが、稚児舞では男児が振袖の着物に袴を穿き鳥兜を頭に被って舞う。現在の宮内庁楽部や大阪四天王寺の《太平楽》は唐代中国の武将の<sup>いでたち</sup>出立とされる金と赤の鮮やかな色合いの豪華な装束と武具を身につけて舞う、いわゆる<sup>とうがく</sup>唐楽<sup>ぶのまい</sup>の武舞であり、日本各地の《太平楽》とは異なる。東北の《太平楽》がいつから戦国時代の鎧兜を身に付けて舞っているのか、それを示す資料は残っておらず、《太平楽》が最初に東北にもたらされた時にどのような装束だったのかも定かではない。しかし、江戸時代の文献<sup>4)</sup>には「鎧兜」を身に付けて舞っていたとあり、江戸時代には現在のような装束で舞われていたと考えられる。こうした日本各地の《太平楽》について言及した論文は少なく、小野功龍（1974）、高橋美都（2005）や田鍬智志（2012）などの論文が挙げられる。

### 3. 東北地方に伝承される《太平楽》

#### 3.1 山寺の《太平楽》

東北地方の舞楽は前述したようにすべて山寺に起源を発するといわれる。山形県と宮城県の県境近くの山中に建てられた山寺（山形市）は、平安時代（860・貞観2年）に天台宗の慈覚大師が開いたと伝えられ、山寺の舞楽はその時に随伴した楽人「<sup>はやしえちぜんのかみまさでる</sup>林越前守政照」<sup>5)</sup>が都の舞楽を伝えたことに始まるという。林越前守はその後山寺に留まり、山寺の行事の折に舞楽を奉納したというが、山寺は何度も火災にあったため、古い資料が残っておらず、山寺舞楽の古い歴史は不明である。

林越前守の子孫（以後、林家と表記）は、南北朝の戦の影響で山寺が衰退したところに慈恩寺（寒河江市）に移り住み、山寺や平塩神社（寒河江市）でも舞楽を奉納、その後、谷地（河北町）の神社を本拠地として現在に至っている。江戸時代の山寺についての記録<sup>6)</sup>には次のようにある。「三月廿四、五日兩日御祭礼 毎年執行之事 慈覚大師伝来之舞楽…… 十八日 谷地村より舞人林兵庫<sup>7)</sup>出張いたし宿常力宅にて児三人江舞稽古…… 廿五日 ……閏月のある年は太平楽とて鎧兜にて四人に而舞ふ……」<sup>8)</sup>。また、小林兵庫（林兵庫の隠居後の名）が書き残したという林家の『舞楽

3) 本論文 p. 94〔表1〕「《太平楽》を含む地方の舞楽の演目一覧」参照。

4) 『舞楽行事』（注6）、『舞楽記録』（注9）、『奥州名所図会』（注31）、『奥羽観蹟聞老志』（注34）参照。

5) 林越前守政照は天王寺方（大坂）の楽人と伝えられるが、現在も詳細は不明。

6) 写本（遠藤芳松写）1894（明治27）年、原本の成立年代は不明。『舞楽行事』は1865（慶応元）年までの山寺における舞楽行事を記したもの。翻刻：川崎浩良 1963「山寺舞楽の変遷」『羽陽文化』59：1-3。注9)の林家所蔵『舞楽記録』と類似。

7) 林越前守の子孫で江戸時代に谷地村に住んでいた舞人、17世紀中ごろから18世紀初頭（寛文～享保年間）に活躍したと思われる。

8) 以下、本論文の引用文表記は翻刻に従った。

記録』<sup>9)</sup>には「山寺御祭礼 三月廿四日 太平楽 是舞壬年ニアリ 同廿五日 太平楽…… 乙王 夜叉王 幸王 禪王 鎧甲ヲ着刀ニテ舞」などとあり、江戸時代には閏年や壬年<sup>10)</sup>に、鎧兜や刀をつけて《太平楽》を舞っていたことが確認できる。

林家は、代々一子相伝を守ってきたため今日まで一人舞が中心であった。そのため、四人で舞う《太平楽》は林家ではなく、慈恩寺の一山衆（慈恩寺に所属する僧）が担ってきた。したがって、江戸時代に山寺で行われた《太平楽》も山寺の一山衆が舞っていたものと推察される。林家の『舞楽記録』に記された《太平楽》の舞人と考えられる「乙王 夜叉王 幸王 禪王」<sup>11)</sup>が実際にどのような人をあらわすのかは不詳だが、四人で舞ったことは確かであろう。山寺では明治以降、定期的な舞楽法要は行われず、記念年に舞楽が奉納されているが、《太平楽》に関する記録は不明である<sup>12)</sup>。

### 3.2 山形県谷地八幡神社・慈恩寺における林家舞楽の《太平楽》

《太平楽》は四人で舞うため、現在でも林家舞楽では慈恩寺の一山衆がその役を担っているが、今日まで山寺、慈恩寺、谷地八幡神社での舞楽全体を林家が担ってきたため、《太平楽》を含め林家舞楽としている。

かつて旧暦の閏年に舞われてきた林家の《太平楽》だが、近年は毎年舞われている<sup>13)</sup>。山寺の舞楽を担っていた林家が最初に移り住んだ慈恩寺では、現在でも5月5日<sup>14)</sup>の「一切経会」に際して林家が舞楽を奉奏しており、8番の舞楽（《燕歩》《三台》《散手》《太平楽》《安摩》《二の舞》《陵王》《納曾利》）の内、《太平楽》と《二の舞》だけは慈恩寺の衆徒が舞う。林家の『舞楽記録』には、1720（享保5）年に林兵庫が書いた記録として、谷地八幡宮と立石寺と慈恩寺の祭礼のとき古くからの舞楽を笛・ひちりき（翻刻は仮名表記）役と太鼓役とともに相勤めたことが見られ（本田1974: 703）、林家は18世紀の初頭にはこの3か所に出仕していたことが明らかである。なお、この記録は近年、林家舞楽で用いられていない楽器「ひちりき（箏簞）」が使われていたことを示す貴重な史料でもある。谷地八幡、立石寺（山寺）、慈恩寺で江戸時代に行われていた舞楽をすべて林家が担っていたことを考えれば、おそらくこの3か所の舞楽は同じだったといえるし、《太平楽》

9) 林家所蔵の手書き卷子本。翻刻『日本庶民文化史料集成 1』（本田安次 1974: 701-726）。江戸時代の山寺、慈恩寺、谷地八幡神社の祭礼における舞楽の記述がある。原本の成立年代は不明。

10) 壬は十干の一つ、壬年は10年に一度。

11) 『吾妻鏡』1265年3月4日の項に「太平楽 乙王 夜叉王 松若 禪王 瑠璃王 幸王」とある舞人の名によるものか。名取神社や白山神社で六人舞として行われたのはその流れか。

12) 廃仏稀釈の影響で1870（明治3）年から舞楽は中止され、1903（明治36）年に復活。明治末期から大正年間にかけて毎年行われた時期もあるようだが、舞楽名の記録はない。最近では1963、1975、2006、2013年に林家が奉納。筆者が調査に行った2013年は50年ぶりの本尊薬師如来開帳記念に《燕歩》《安摩》《陵王》《納曾利》が舞われたが、これらの舞はすべて一人舞。

13) 本田安次2000: 208 本田が訪れた1944（昭和19）年に《太平楽》があり、このころには毎年舞われているとある。筆者が調査している2004年以降は、毎年行われている。

14) 江戸時代は旧暦4月8日、その後新暦5月8日に、近年は5月5日（祝日）に行われている。

に関してもそう違いがあったとは思えない。

2011年には30年ぶりに舞人が四人全員交替して若返り、また、2016年は慈恩寺の舞人四人の鎧兜と装束が新調され、そのお披露目の舞楽ともなった。30年前に舞人が交替した時に鎧兜装束一式も新しくなったが、その時以来毎年使っているため装束の傷みが激しく、今回の運びになったと聞く<sup>15)</sup>。前回と同じ様式の4種の鎧兜と装束は新しい舞人の体に合わせて作られたものといい、今回の舞人に感想を聞いたところ、体に合った装束で舞いやすかったとのこと、慈恩寺ではしばらくはこの鎧兜と装束の《太平楽》が見られるだろう。なお、慈恩寺では、この50年近く四人の舞人がそれぞれ異なった鎧兜を身に付けて舞っていたのが数葉の写真からも確認できる（芸能史研究会1970: 286～287の間の写真ページ、本田2000: 写真69）。本堂内にはかなり時代を経た鎧兜が4種類あり、それらは室町時代くらいのもものと伝えられている。

現在、《太平楽》の鎧兜と装束は慈恩寺と谷地八幡神社でそれぞれのものを所有し、谷地の例祭の時は慈恩寺の舞人四人が、谷地八幡神社に保管されている鎧兜（4領同じもの）を着用して舞っている。

慈恩寺と谷地八幡神社の舞楽では一人舞は林家が受持つが、四人舞の《太平楽》は慈恩寺の一山衆、二人舞の《二の舞（爺と婆の舞）》は慈恩寺では一山衆が、谷地ではかつては林家の当主と慈恩寺の一山衆の一人、最近は林家の当主とその後継者の二人が担当している<sup>16)</sup>。音楽を奏する楽人たちは慈恩寺、谷地八幡にそれぞれ居り、現在は用いる楽器に違いがある。慈恩寺では龍笛（五～七人）・太鼓・鉦<sup>かね</sup>の3種の楽器を使用、太鼓と鉦を一人で演奏している。谷地八幡神社では龍笛（五～七人）・鞆鼓・楽太鼓・鉦鼓を使用、3種の打楽器はいわゆる雅楽の楽器で、奏者はそれぞれ一人ずつ、計三人で演奏しており、慈恩寺と異なる。この小論では新しい鎧兜で行われた2016年5月の慈恩寺で筆者が収めた《太平楽》をもとに、慈恩寺の《太平楽》の音楽を〔譜例 J1〕〔譜例 J2〕〔譜例 J3〕として掲載した<sup>17)</sup>（舞姿は〔写真 1〕を参照）。

現行の慈恩寺の舞楽で用いられる音楽の構成は以下のとおりである。

音楽なし→〔J1〕→音楽なし→〔J2〕→〔J3〕×19回→ 音楽なし→〔J2〕→〔J3〕×4回→音楽なし
---

舞人四人が登場する冒頭の部分と、最後に退場する部分、さらに〔J2〕の前の部分には音楽は演奏されない。〔J1〕は最初に登場する舞人①が一人で鉦をもって舞う〈鉦の舞〉のときに演奏され、1回のみ使用される。〔J2〕は笛と太鼓のみの短いフレーズで2回演奏されるが、いずれもすぐに〔J3〕の音楽になる。〔J3〕は林家舞楽《太平楽》の中心的な音楽であり、全部で23回反復される。以上、

15) 那須孝可氏（慈恩寺観光振興会会長・元《太平楽》の舞人）の話、および山形新聞2016年4月28日、5月7日朝刊の記事による。

16) 加納2006: 22～23「舞人・楽人一覧」、それ以降は筆者の調査により追加。

17) 譜例の楽譜は、白山神社を除いて、いずれも筆者が収録したものから採譜。白山神社の楽譜は東北歴史博物館（小谷氏提供）のDVDから筆者が採譜したものである。p. 100〔譜例〕参照。

舞と音楽との関係については文末の〔表 3〕も参照されたい。

現在、林家舞楽の《太平楽》では舞人が大声で唱歌<sup>しょうが</sup>を歌ったり、大声を出すことはなく、小さく何か歌いながら舞っているのが聞こえるだけである。2011 年 5 月にデビューした《太平楽》の舞人の一人を取材した山形新聞には、次のような記事がある<sup>18)</sup>（引用部分の下線は筆者による）。

「舞はすべて口伝。龍笛や太鼓の演奏に合わせ、四人の舞人が『た〜りょ、りゃ〜りょ』『らいはいひ』など独特の口調の唱歌を頭の中で唱えながら、膝を曲げたまま足を上げたり、体を回転させるなどの動きをする。……」

伊野義博（1996、1997、1999）は、地方舞楽の唱歌と身体表現に関する先行研究においては、唱歌が舞の習得に不可欠なものとして機能していることに言及している。唱歌にはさまざまな類型が存在し、さらに、楽器の習得・教習を目的とする「楽のための唱歌」と区別される「舞のための唱歌」ともいべき唱歌が用いられていることなどが確認されている。林家舞楽でも「舞のための唱歌」が重要視されている。現在の唱歌は非公開のため、参考までに江戸期の笛の唱歌を示す（本田 1974: 706）。

#### 林家舞楽《太平楽》 ふえしょうかのこと

ちやりた引 ろらろら引 ちやりた引 ろらろら引

ちやりた引 ろらろらろらろら引 た引 ろらろらろらいはいり

ち引 りやりら引 りち引 りやりら引 りたろりやと引 ろちうり引

りたりやた引 りやろりやろりやりやろらいはいり

また、林家の『舞楽記録』の「八幡宮御祭礼」の項には、祭礼の時の舞楽名とその中のいくつかは舞の次第が書かれており、《太平楽》については次のような記事がある（本田 1974: 702）。これは江戸時代の記録ではあるが、《太平楽》の舞の所作がかなり詳しく記述されている。特に太刀を抜いたあとの〈抜剣の舞〉について、「太刀を振って入る」「足を開いて外袖で三度」「太刀を三振りして立て足で開く」など具体的である。

#### 《太平楽》刀印に而

初のわさ如習して太刀ぬきて内袖行道して 太刀右よりふつて入る

足ひろいて外袖三度つゝして 宿内へ三度 太刀左よりふつて入

内袖三度中にて打立 つま宿三度切りぬけ 太刀右よりふつて入

足ひろいて外袖三度 宿内へ三度 太刀左よりふつて入

内袖三度中に打立 つま宿三度して 切りかへるなり

○仕廻り楽 太刀ぬき外袖三度 打立て宿内へ三度

次に下に居り居りつばかへしゝて入る也

声かけ覚

18) 2011 年 1 月 12 日山形新聞朝刊。



太刀三ふりして立て足にてひろい袖付する 太刀ノふりやうけり時

声かけハふつて入といふべし

またつま宿より切りぬけるときのかけ声切て入るといふべし

後述するように、平塩神社の《太平楽》でも類似した用語が見られるため、かつては平塩舞楽でも同じことばが使われていた可能性が考えられる。しかし、平塩舞楽では現在、林家舞楽のものと異なる表現になっており、両者の比較検討が必要となろう。今後の課題の一つである。

### 3.3 山形県平塩熊野神社の《太平楽》

現在、平塩熊野神社の氏子を中心に行われている平塩舞楽も、16世紀中ごろ（天正年間）までは林家が担っていたが、その後、林家の手を離れたと伝えられる（丹野 1962: 85～87）。雑誌『婦人やまがた』の記事によれば、最上川の洪水のために林家が平塩まで来られなくなったとき、地元の人たちで舞楽を受け継いだという<sup>19)</sup>。前述のように18世紀初頭には林家は平塩に出仕しておらず、平塩神社の社伝に15世紀の中ごろ一時舞楽が中断され、16世紀中ごろ年に再開されたとあるのを考慮すると、林家が谷地に定住するようになった16世紀中ごろから平塩に出仕していない可能性もある。舞楽の曲名は、林家のものと共通しているが、音楽、舞振りなどが大きく異なっていることから、林家が担ってきた舞楽を途中から地元の人たちだけで行うこととなり、林家の舞楽を踏襲しつつ次第に平塩独自の舞楽に変容していったことは容易に想像がつく。

平塩舞楽では、林家舞楽と同じ題名の舞楽が4月3日の例大祭で奉納されている。《振鉦》（林家では《燕歩》）《散手》《太平楽》《安摩》《二の舞》《三台塩》《還城楽》《抜頭》《陵王》《納蘇利》（林家では《納曾利》）の10番のうち、平塩舞楽では《三台塩》《還城楽》《抜頭》の3番が稚児舞である。林家舞楽では《還城楽》《抜頭》のみが稚児舞で、《三台塩》は大人が舞うという点に平塩との相違が見られる。両者の舞楽では《太平楽》と《二の舞》を除けば、稚児舞も含めすべて一人舞である。

当地では旧暦の閏年に《太平楽》を舞うことに長年こだわってきたが、近年それを固守していくのが困難になっているといい、2016年には新暦の閏年に《太平楽》が行なわれた。《太平楽》は体力が必要ということから、毎回、舞人が交替していたものの、昨今、同じ舞人が連続して舞ったこともある<sup>20)</sup>。しかし、2016年4月の例大祭では舞人四人が全員交替し、50代から60代だった舞人が20代から40代に世代交替した。舞台後方にある楽屋で伴奏するのは龍笛、太鼓、磬（鉦の一種）<sup>21)</sup>

19) 1971年5月号 p. 21 著者不明「京都舞楽の流れをくむ平塩舞楽」。慈恩寺と谷地は最上川とその支流の寒河江川の2本の河川の北側、平塩は南側にあり、その説もうなずける。今も川幅の広いこのあたりの最上川には長い橋がいくつもかかっており、この川が渡れないほど氾濫した場合はそうした状況になった可能性がある。

20) 筆者が調査した2005～2016年の間に《太平楽》が行われたのは2006、2009、2012、2016年で、2006、2009、2012年の3回は三人の同じ舞人が舞っている。

21) 磬は寺院の楽器。平塩神社の隣には平塩寺という寺があり、神社の境内に鐘楼が残る。神仏混交時代の名残である。現

の3種で、各一人ずつ合計三人で演奏する。笛が一人というのは珍しく、ここでは古くから笛が一人で演奏しているのも特徴的である<sup>22)</sup>。

平塩舞楽の《太平楽》が東北地方のほかの《太平楽》と大いに異なる点は、舞人たちが大きな声で唱歌を歌いながら舞うところである。唱歌は舞楽の基本であり、林家舞楽でも打ち物の奏者は唱歌を歌いながら演奏し、前述したように舞人も舞うために心の中で歌っている。それは舞と音楽のリズムを合わせるためでもあり、「舞のための唱歌」という唱歌の機能がここにもある。平塩舞楽も林家舞楽も各舞に唱歌が残っているが、舞人が大声で歌いながら舞うというのは平塩の《太平楽》だけである。舞人四人が声をそろえて唱歌を歌いながら舞うこと、戦国時代の鎧兜を身にまとい、鉾や太刀を使った勇壮な舞であること、木材を組み合わせただけの舞台上で激しく舞うと舞台の床板が跳ねて勇ましい音が出ることも加わり、当地の《太平楽》は舞に興を添えている。

平塩舞楽の唱歌は全曲にあり、それらについては前稿（加納 2008: 43～62）で一部紹介した。これらの唱歌がいつから歌われているのかを示す史料は今のところない。昭和初期の唱歌<sup>23)</sup>も戦後すぐに書かれた唱歌<sup>24)</sup>も現在使われている唱歌<sup>25)</sup>と同じであることから、唱歌はこの100年近く変化しないまま歌われ続けていると思われる。

当地の《太平楽》の唱歌も身体的な表現のための手段としての唱歌として有効であり、四人の舞人が息を合わせるために必要な手段と考えられる。下記に示した唱歌が20回以上繰り返されながら舞が変化していくが、フレーズとフレーズの間に生じる唱歌の微妙な「間」が舞の型をそろえるのに非常に役立っている。時間がかからない身体移動のときは「間」は短く、身体的に大きな動きをしなければならないときの「間」はかなり長い。そうしたあいまいな「間」を息使いで感じ、四人で調節しているところも興味深い。次に示すのは現在舞人たちが舞いながら歌っている唱歌である<sup>26)</sup>。唱歌とその旋律は論文の〔譜例 Hi1〕〔譜例 Hi2〕〔譜例 Hi3〕に示す（この譜例は2016年4月の、筆者による録音資料から採譜した）。

#### 《太平楽》の唱歌

- 〔Hi1〕 ひイヤりとォろ らァろらァい  
ひイヤりとォろ らァろらい  
ひイヤりとォろ らァろろろろろろろろろろろろろろろろらァい
- 〔Hi2〕 らァろらァろろろろろらァ はァひん
- 〔Hi3〕 ちいりいらうらァりい◆  
ちいりいらうらァりたァ◆ ろらとうろ◆

---

在使用している磐には「元禄十一戌寅天六月日常香坊」の銘がある。

22) 1925年の雨乞祭の参加者名が楽屋外の幕に書かれており、その時の楽器奏者は各一人ずつ。

23) 現平塩舞楽保存会会長石神寒月氏の祖父が書き写した昭和初期の唱歌と舞の型の手書き本。

24) 平塩神社宮司建部真也氏の祖父が1947（昭和22）年に書いた『古舞楽鼓譜』。

25) 石神寒月氏が現在、舞の指導に使用している唱歌の本『平塩熊野神社舞楽』（2005年に写すとある）。

26) 唱歌は注24)と25)の資料による。

ちうら◆ らりたりヤ◆

たァりやりヨ◆ りやりヨりヤ◆ りやりヨりヤ◆ はァひん

現行の平塩神社の舞楽で用いられる音楽（唱歌）の構成は以下のとおりである。

音楽なし→〔Hi1〕→音楽なし→〔Hi2〕→〔Hi3〕×23回→

音楽なし→〔Hi2〕→〔Hi3〕×3回→音楽なし

〔Hi1〕〔Hi2〕〔Hi3〕の部分では舞人が歌う唱歌と共に龍笛・太鼓・磬が演奏され、龍笛は唱歌の旋律とほぼ同じ旋律。舞人四人が登場する冒頭の部分と、最後に退場する部分、さらに〔Hi2〕の前には音楽は演奏されない。これらの部分は慈恩寺と類似している。同じ上記の唱歌のうち、〔Hi1〕は鉦をもって登場した大將が鉦を振りながら一人で舞う〈鉦の舞〉で、大將が一人で一度だけ歌う。〔Hi2〕は四人がそろって舞い出す時の唱歌であり、その後はすぐ〔Hi3〕が繰り返されるので、この〔Hi2〕のフレーズは舞はじめの唱歌ともいえる。〔Hi3〕は23回繰り返され、〈徒手の舞〉〈抜劍の舞〉など、舞人がいろいろに向きを変えながら舞う。23回繰り返される唱歌の旋律は同じだが、「◆」をいれた部分の長さが舞により微妙に異なる。これが「間」であり、四人の舞人は唱歌を歌いながら「間」を合わせて舞を舞う（〔表3〕参照）。

さらに上記の〔Hi3〕の唱歌が23回反復されるなか、ときどき大將が声を発しているのが聞こえる。それは下記に示したもので、舞の所作をあらわしたものと考えられる。3行目の「打立テ当テ宿」（うったってあたってやど）以降を舞の途中で大將が発する。この習慣も昭和の初めから変わっていないようだ<sup>27)</sup>。舞人たちの記憶を呼び覚ますため、あるいは次の舞の所作の確認のためと思われる。前述のように林家の《太平楽》についても刀を抜いてからの所作が示されており、慈恩寺（谷地八幡神社）の舞楽と類似した用語が使用されている。

#### 《太平楽》

一ムジリ 二ムジリ 三ムジリ 千駄一足ニテ刀を抜く

トロ 打立テ当テ行道

トロ 打立テ当テ宿

トロ 打立テ当テ振込

チリ 打立テ宿

チリ 打立テ鎧附 左

二のチリ 打立テ向宿

チリ 打立テ切込 向に行く } 2回繰り返す

トロ 打立テ当テ宿（中休み） 打立テ宿

最初の「一ムジリ 二ムジリ 三ムジリ 千駄一足ニテ刀を抜く」はあまり方向を変えないで主に手を使って舞う〈徒手の舞〉で、太刀を抜くところまで。「ムジリ」の意味は不明だが、腰を落

27) 注23)の資料には現行と同じことが書かれている。



とし、体をひねって右上を見る動作をあらわしており、この所作は平塩だけに見られるため、「ネジリ」の変形と推察している。「刀を抜く」からが〈抜剣の舞〉で、太刀をもって円陣を組み、反時計まわりに回って、各自が元の位置に戻るまでの型。「行道<sup>きょうどう</sup>」とは本来は寺院で僧侶が経を読みながらお堂の中を右回りにめぐることをいい、ここでは舞台の周りを回るという意味で使われている。「トロ」や「チリ」は唱歌で使われることばで、区切りとなるところ。3行目から8行目までは2回繰り返されるが、この間の1行が大体唱歌の1フレーズ分（4行）に当たる。ここは舞人四人が左右入れ替わったり、一列に並んだり、向き合ったりとせわしく動く、もっとも中心的な舞の部分である。最初の配置に戻り、四人が中央を向いて左膝をついて座ると、太刀を右手でもったまま体の前に立てて、しばらくそのままの状態で待つ。これが「中休み」にあたる。そのあとは大将が立ち上がって舞い始めると、残りの舞人三人も舞い、ひとフレーズ舞い終わると、順に舞台から降りていく最後の舞となる。唱歌の1フレーズ（唱歌4行分）がほぼ1分、全体は30分近い。平塩舞楽の中では最も長い舞であり、今回取り上げた東北の《太平楽》のなかでも長さが一番長く、また動きがもっとも激しい舞である<sup>28)</sup>（舞姿は〔写真2〕参照）。

### 3.4 宮城県名取熊野神社の《太平楽》

そのほか現在東北地方で《太平楽》が行われているのは宮城県名取市の熊野神社である。しかし、名取の舞楽については詳しい情報がほとんどなく、この章は江戸時代のわずかな文献と2006年に筆者が調査した時の映像と写真に基づく。

名取神社の例大祭では神楽殿（池の上に建てられた常設のもの）で神楽が奉納されたあと、池の上の仮設舞台（水上舞台）で舞楽5番《開闢<sup>かいびく</sup>の舞》（《振鈴》に当たる舞）、《龍王》（陵王の面をつけて舞う）、《二の舞》（爺と婆の舞）、《稚児舞》、《太平楽》が行われる。《太平楽》は最後の演目であり、2006年には六人で舞っていた<sup>29)</sup>。舞人は全員異なる鎧（さまざまな色合いの糸のもの）で、白手袋、黒足袋にすね当てを付け、藁草履を履いている。

名取神社の舞楽で用いられる音楽の構成は以下のとおりである。

[N1] × 8回 → [N2] × 20回 → [N1] × 12回
-------------------------------------

2間四方ほどの狭い仮設舞台の上で六人の舞人が舞う《太平楽》は登退場に幅1m、長さ3m程度の狭い橋が使われ、一人ずつ舞人が橋上で体をゆすりながら向きを変えつつ舞台上に登場。舞台の中央で相撲の四股を踏むように体を2、3回左右に大きく動かし、所定の位置に着くとすぐに左膝をついて跪く。左膝をついて跪くという舞の型は、宮内庁の現行の《太平楽》にも見られ、今回取り上げた東北の《太平楽》ではどの地方にも共通している<sup>30)</sup>。

28) 〔表3〕「平塩舞楽」参照

29) 名取市によると、ここ数年、舞人の不足などのため四人で舞っているという。

30) 〔表3〕各舞楽参照。

慈恩寺や平塩神社では舞人の登退場の時は音楽が奏されないのに対し、名取神社ではこの間に〔N1〕のフレーズが8回反復される。また、ここでは舞人①の定位置が慈恩寺や平塩舞楽の《太平楽》の配置と線対称であることも興味深い。〔N2〕が20回反復される中心的な舞では、左右に三人ずつ分かれた舞人たちがお互いに向かい合ったまま〈徒手の舞〉を舞いはじめ、曲の半ばで2列のまま太刀を抜いて舞う〈抜剣の舞〉、やがて太刀を抜いたまま円陣となり一回り廻って元に戻ったところで舞い終わる。太刀を納めるとすぐに退場となる。退場のときは、登場と同様〔N1〕のフレーズが12回反復される間に、登場と同じ所作をして舞人⑥から順に舞台を降りていく。最後に残った舞人①は、舞台上にめぐらしてある注連縄のうち、帰り道の場所にかかっている縄を太刀で切り落としたあと、橋を渡っていく。使われている太刀が真剣であることが分かる。今回扱った舞楽のなかで最初に登場した舞人①が最後に舞台を降りるのは名取神社だけで、舞人①が最後に注連縄を切る所作は、すべての舞楽の終了を示すものといえる（〔表3〕参照）。

舞そのものに大きな動きはないが、鎧兜の六人が舞台上で太刀を抜く姿は勇壮である。奏されるのは太鼓と笛のみで、登場退場の時は太鼓がフリーリズムで打たれ、六人全員が一緒に舞うときは太鼓の規則的なリズムに乗って笛が吹かれる（〔譜例 N1〕〔譜例 N2〕参照）。舞楽全体は約12分。太鼓一人と笛一人の演奏者は上下白衣に黒烏帽子で、神楽奏者が兼務。舞台に近い建物のなかから舞台を見ながら演奏しており、笛の奏者は途中で交替していた（舞姿は〔写真3〕参照）。

名取神社の祭礼については、19世紀初頭頃に編まれた『奥州名所図会』<sup>31)</sup>の「名取熊野神社」の項に「神の時に舞あり、はなはだ古雅なり……熊野堂の神事、九月九日より十一日に至る三日の間、流鏑馬或は舞神楽等、みな古しへなる風俗の中に、二の舞といへるありて、尉と姥殿仮面を被き舞ふ。」と記載され（朝倉 1987: 336）、池の上の舞台で舞う《二の舞》（爺と婆の舞）が描かれているが、《太平楽》についての記述はない。そのほかに舞楽についての資料は少なく、山寺の舞楽の流れを汲む<sup>32)</sup>ともいうが、現在に至る《太平楽》の系譜は不明である。

名取神社の舞楽で特記すべきことは5番の舞楽（《開闢<sup>かいびやく</sup>の舞》《龍王》《二の舞》《稚児舞》《太平楽》）にすべて同じ音楽が使われていることである。いずれも二部に分かれており、登退場には拍子の無いフリーリズムの〔N1〕、舞の当曲にはリズムミクな旋律〔N2〕が使われている。最初は各舞にそれぞれ異なる音楽があったのだろうが、長い年月のうちにもっとも演奏しやすい音楽、あるいはもっとも特徴的な音楽だけが残ったものと思われる。

### 3.5 宮城県仙台白山神社の《太平楽》

宮城県仙台市の白山神社でも以前は《太平楽》が行われていたが、2000年を最後に後継者がい

31) 著者は仙台大崎八幡宮の祀官、大場雄淵（?～1829・文政12）とされ、19世紀の初頭にまとめられたと考えられる。  
翻刻：朝倉 1987: 333～336。

32) 名取市や名取熊野神社のホームページによるが、その典拠は不詳。筆者の調査でも不詳。

ないという理由で行われなくなった。東北歴史博物館が仙台白山神社の《太平楽》の最後の記録を映像で残した DVD<sup>33)</sup> を参考に江戸時代の文献と合わせて考察したい。

白山神社は江戸初期に伊達正宗によって建てられ、明治になるまで国分寺と同じ敷地にあり、薬師堂とも呼ばれていた。この神社の《太平楽》は、18 世紀初頭の『奥羽観蹟聞老志』<sup>34)</sup> の「白山ノ神詞」の項に「三月三日の祭礼に……太平楽、衆徒戎衣を着て白刃<sup>35)</sup>を取り、舞ふ……龍王納蘇里、神人仮面を被り舞ふ」(佐久間 1926: 202 ~ 203) とあることから、江戸時代の中ごろには《太平楽》は戎衣(戦用の鎧兜)を身に付けた衆徒(国分寺の僧侶)が刀を抜いて舞っていたこと、《龍王》(《陵王》のこと)と《納蘇里》(《納蘇利》に同じ)は白山神社の神官たちが面をつけて舞い、神仏混交であったことがわかる。現在も残る白山神社の陵王と納蘇利の 2 面の舞楽面は山寺所縁のものと伝えられる。

また、名取熊野神社でも引用した 19 世紀初頭の『奥州名所図会』の「木下国分寺」の項、《太平楽》(〔図版 1〕参照)の説明に「太平楽は、三月四日薬師の本堂の前、石の舞台にあり。舞人六人。各戎衣を着、刀を佩きて、左右に例し、半過ぎて刀を廻し舞ふ。その風姿古にして、見る人大いに嘆息す。舞人は坊中より出づる。相伝ふ。天平の雅楽なりと。戎衣尤も古し。」(大場 1987: 182) とある。《太平楽》以外には、《龍王》と《納蘇利》の 2 曲が舞われたとこの書にもある。以上のことから、白山神社(国分寺)では、江戸時代に薬師本堂前の石舞台で《太平楽》《龍王》《納蘇利》が舞われていたといえる。

本田安次によれば、伊達家が白山神社を治めていたころには石舞台の上で舞楽が行われていたが、のちに石舞台は土で埋められ、1934 年に石舞台が再建されたとある(2000: 214)。再建されたものと思われる高さのある石舞台で六人が舞う《太平楽》の写真(本田 2000: 写真 73)があるが、筆者が訪れた 2005 年には石舞台はその跡がわかる程度で、高さがそれほど高くなかった。2000 年に東北歴史博物館が記録した DVD には《振鉦》(《納蘇利》)の面をつけて舞う《四方固めの舞》《龍王》《太平楽》が収録されており、江戸時代の舞楽が 21 世紀初頭まで伝承されていたことを考えると、中止になったのは非常に残念である。なお、この映像では白山神社の最後の舞楽は石舞台ではなく、神社本殿前で行われており、石舞台はすでに使われていなかったものと思われる。

白山神社最後の《太平楽》、舞楽の音楽の構成は以下のとおりである。

[Ha1] × 4 回 → [Ha2] × 15 回 → [Ha1] × 4 回

本殿前の広場に注連縄を張り、そこを舞台に見立てている。四人で舞う《太平楽》は鎧兜を身に付けた舞人が太刀を佩き、途中で太刀を抜いて円陣を回る。所要時間は 10 分ほどで、四カ所の《太平楽》のうち最も短い。音楽は太鼓(1 台)と笛(数本: 映像からは確認できない)で奏されるが、

33) 東北歴史博物館小谷氏提供の DVD。

34) 佐久間義和(1653 ~ 1736)が編纂した仙台の地誌、1719 年(享保 4)完成。6 巻からなる。翻刻が『仙台叢書第 14 巻』(1928 年刊行)にある。

35) 鞘から抜き取った刀のこと。

登場退場の音楽と舞楽の二部分に分けられ、登場退場の時はフリーリズム、舞楽そのものは4拍子4小節の旋律型が反復される。太鼓奏者は上下白衣に黒烏帽子で、名取熊野神社と類似しており、ここでも神社の神楽奏者が演奏しているものと思われる。しかし、音楽は旋律型もリズム型もまったく異なり、舞も白山神社独特のものである（〔譜例 Ha1〕〔譜例 Ha2〕〔図版 1〕〔表 3〕参照）。

#### 4. まとめ

山寺に起源を発するという林家舞楽（慈恩寺）、平塩神社、名取熊野神社、白山神社の《太平楽》についてそれぞれの舞人の配置に注目し、舞人の所作と音楽との関係を一覧表にまとめたのが〔表 3〕である。音楽は譜例のように四者四様であり、四者間に旋律的な類似性はほとんど認められないが、〔表 3〕から舞の所作にはある共通点が見られる。四カ所の《太平楽》は登場・舞楽・退場の3部分で構成され、四人（あるいは六人）の舞人が向かい合ったところから〈徒手の舞〉、太刀を抜いて〈抜剣の舞〉を舞い、円を描きながら舞台を回り元の位置に戻ると太刀を鞘に納める。その後、〈刀返しの舞〉を舞って退場する林家舞楽と平塩舞楽、太刀を納めるとすぐに退場する名取神社と白山神社の舞楽と二分される。

東北地方の《太平楽》は最初と最後の舞人の配置が向い合せであること、舞に片膝をつく動作があること、〈鉦の舞〉〈徒手の舞〉〈抜剣の舞〉など共通の舞の所作が挙げられるが、これらは宮内庁の現行の《太平楽》の所作との類似も多い。今回は触れられなかった宮内庁の現行の《太平楽》やほかの地方の《太平楽》との関連や比較等、さらに追究を進めたい。

謝辞：この小論をまとめるに当たり、谷地八幡の林家舞楽・慈恩寺舞楽のみなさま、平塩舞楽保存会のみなさま、東北歴史博物館の小谷竜介氏にお世話になりました。また、英文要旨につきましてはカーレン・ノーマンドさん、橋都みどりさんにお手数をおかけしました。ここに心からのお礼を申し上げます。

#### ■参考文献・引用文献■

- ・朝倉治彦編 1987『日本名所風俗図会』角川書店。
- ・安倍季尚 1690（成立）「楽家録」翻刻 1977『覆刻日本古典全集』現代思想社
- ・伊野義博 1996.3「地方舞楽における唱歌の機能（1）」『新潟大学教育学部紀要 37-2』 pp. 307 ～ 325。
- ・伊野義博 1996.10「地方舞楽における唱歌の機能（2）」『同上 38-1』 pp. 131 ～ 141。
- ・伊野義博 1997.10「地方舞楽における唱歌の機能（3）」『同上 39-1』 pp. 149 ～ 194。
- ・伊野義博 1999.3「地方舞楽における唱歌の機能（4）」『新潟大教育人間科学部紀要 1-2』 pp. 191

～ 203。

- ・伊野義博 1999.3 「地方の舞楽における唱歌—身体性との関連から」『民俗音楽研究 24』 pp. 1 ～ 10。
- ・遠藤 徹 2000.7 「太平楽」『雅楽 映像解説 2』 下中財団 pp. 38 ～ 49。
- ・大場雄淵 19 世紀初頭「奥州名所図会」翻刻 朝倉治彦 1987。
- ・小野功龍 1974.12 「遠江小国神社に伝承される十二段舞楽について—太平楽舞を中心として」『相愛女子大学相愛女子短期第学術研究論集 22』 pp. 130 ～ 109 \*再録本『仏教と雅楽』では 1975。
- ・加納マリ 2004.3 「地方の舞楽—隠岐国分寺の蓮華会を中心に」『武蔵野音楽大学研究紀要 35』 pp. 41 ～ 60。
- ・加納マリ 2006.3 「地方の舞楽 (2) 山形県林家舞楽の音楽を中心に」『同上 37』 pp. 1 ～ 25。
- ・加納マリ 2008.3 「地方の舞楽 (3) 山形県平塩舞楽について」『同上 39』 pp. 42 ～ 62。
- ・川崎浩良 1963.7 「山寺舞楽の変遷」『羽陽文化』 59 pp. 1 ～ 3。
- ・芸能史研究会編 1970 『雅楽 日本の古典芸能 2』 平凡社。
- ・粕 近真 1233 『教訓抄』 翻刻 1973 『日本思想大系 23』 岩波書店。
- ・寒河江市史編纂委員会編 1994 「慈恩寺舞楽と平塩舞楽」『寒河江市史上』 pp. 866 ～ 875。
- ・佐久間義和 1719 「奥羽観蹟聞老志」 翻刻 1928 『仙台叢書 14』 仙台叢書刊行会。
- ・高橋美都編 2005.3 「四天王寺聖霊会舞楽・能生町白山神社舞楽・遠江国一宮小國神社古式舞楽における太平楽 (泰平楽) の三者比較」『日本伝統音楽研究 5』 109p. + ディスク (1 枚)。
- ・田欽智志 2012.3 「中央の舞楽と地方の舞楽の旋律様式」『日本伝統音楽研究 9』 pp. 57 ～ 73。
- ・丹野 正 1962 「舞楽」『山形県の民俗芸能 第 1 編』 山形県教育委員会 pp. 77 ～ 89。
- ・鳥谷部輝彦 2003 「林家舞楽の歴史的研究」東京藝術大学修士論文。
- ・本田安次 1974 「羽州林家舞楽資料」『日本庶民文化史料集成 1』 三一書房 pp. 699 ～ 726。
- ・本田安次 2000 「羽前の舞楽」『日本の伝統芸能 16』 錦正社 pp. 190 ～ 214。
- ・山形市総務部総務課編 1984 『立石寺文書 山形市史資料 68』 山形市。
- ・著者不明 10 世紀「舞楽要録」 翻刻 1929 『群書類従 12』 内外書籍株式会社。
- ・著者不明 1971.5 「京都舞楽の流れをくむ平塩舞楽」『婦人やまがた』 山形婦人新聞社 p. 21。



〔写真1〕慈恩寺



〔写真2〕平塩神社



〔写真3〕名取神社



〔図版1〕木下白山神社



(写真1～3は筆者撮影 白山神社の図版は角川書店「日本名所風俗図絵」より転載)

〔表1〕《太平楽》を含む地方の舞楽の演目一覧

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
山形県												
平塩神社	舞鈴	散手	太平楽	安摩	二の舞	*三合塩	*還城楽	*抜道	陵王	納管利		
慈恩寺	舞鈴	三合塩	散手	太平楽	安摩	二の舞			陵王	納管利	回向楽	
谷地八幡神社	舞鈴	三合塩	散手	太平楽	安摩	二の舞	*還城楽	*抜道	陵王	納管利	回向楽	
宮城県												
名取鹿野神社	開園の舞	竜王の舞	二の舞	*稚児の舞	太平楽							
(白山神社)	(舞鈴)	(陵王)	(太平楽)									
新潟県												
天津神社	*舞鈴	*安摩	*鴛冠	抜道	*破魔弓	*児納管利	能抜道	*華籠	大納管利	*太平楽	*久宝楽	陵王
能生白山神社	*舞鈴	*候礼	*堂麗利	*地久	能抜道	*泰平楽	納管利	*弓法楽	*児抜道	*輪花	陵王	
富山県												
明日法福寺	*矛の舞	*太平楽	*臨河の舞	*萬歳楽	*千秋楽							
静岡県												
天宮神社	*延舞	色香	*庭胡蝶	*鳥名	*太平楽	*新鞋襦	安摩	二の舞	陵王	抜道	*納管利	獅子
小国神社	*連舞	色香	*蝶の舞	*鳥の舞	*太平楽	*新まつく	安摩	二の舞	陵王	*抜道	納管利	獅子
鳥根県												
鯉岐国分寺	*眠り仏	獅子舞	*太平楽	麦焼舞	竜王の舞	山神・雲徳仏の舞	入り舞					

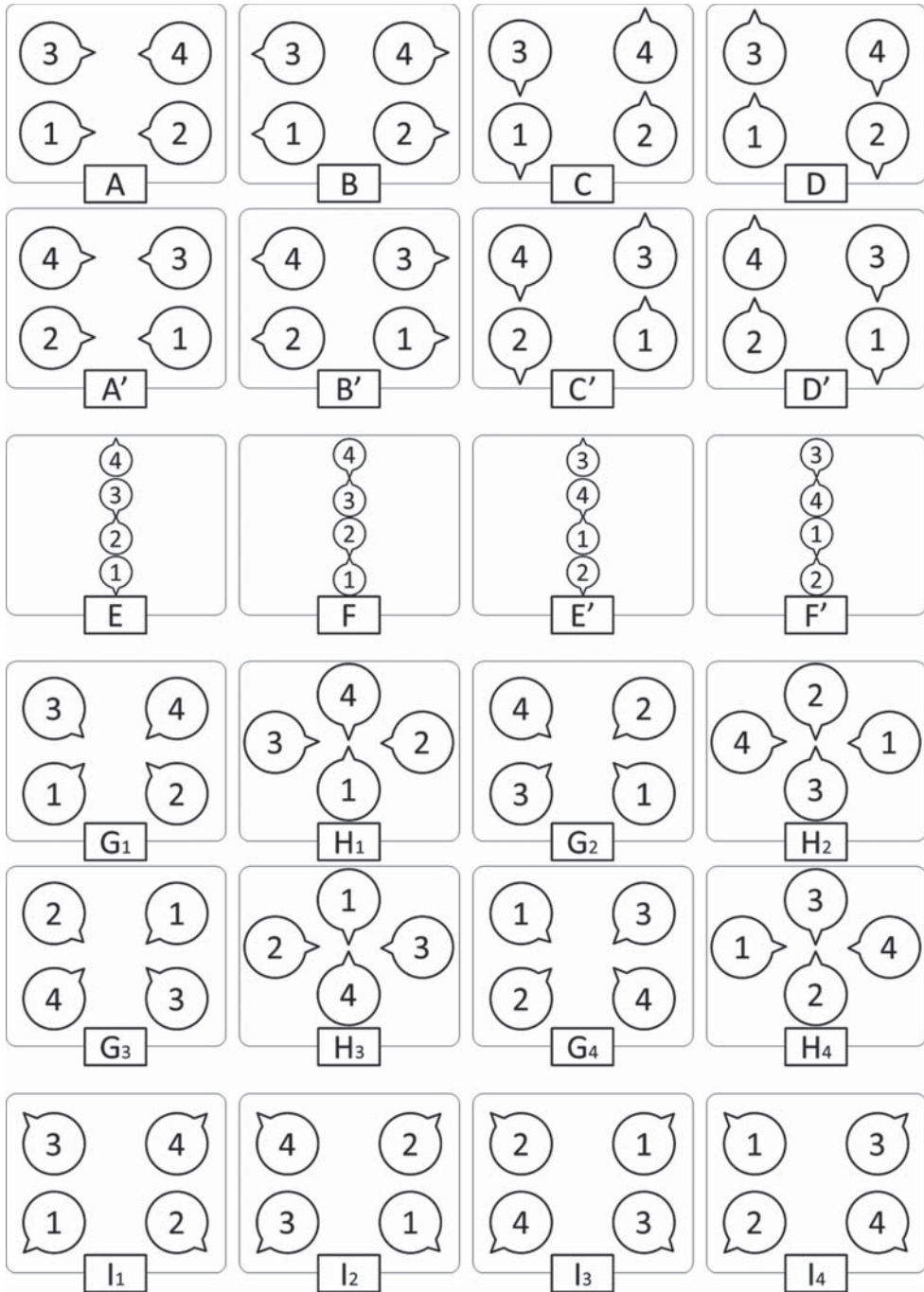
\*：稚児舞  
各寺社の舞はこの順序で舞われる

(加納マリ作表)

〔表2〕 東北地方の舞楽にみる《太平楽》の舞人の配置パターン図一覧

凡例：①②③④は最初に登場する1臈を①とし、順に4臈④までの舞人の位置をあらわす。

〔A〕を基準とした舞台真上からの並び方で、〔A〕の①②側が舞台の前方側とする。



(加納マリ作表)

〔表 3〕 四地の《太平楽》の音楽と舞の比較

慈恩寺舞楽 (2007、2010、2012、2014～2016年の調査にもとづく)		平塩舞楽 (2006、2009、2012、2016年の調査にもとづく)	
音楽	舞人(4人)の配置と所作	音楽	舞人(4人)の配置と所作
音楽なし	登場 ①は舞台の前方中央に進み、正面を向いて 立ったまま待つ。②は舞台後方中央に進み 左膝をついて跪く。③④は順に橋のところに 左膝をついて跪く。楽屋から後見が鉦を 持って登場、①に手渡す。	音楽なし	登場 ①は舞台に続く橋のたもとで神殿に向っ て一礼し、②から鉦を受けとる。橋を通っ て舞台の中央に進み、正面を向いて待つ。
J1	笛中心の演奏、太鼓は最初と最後のみ演奏。 ①のみ舞台前方で〈鉦の舞〉を舞う。その 間、②～④は跪いたまま待つ。	Hi1	①のみ唱歌を歌いながら、舞台中央で〈鉦 の舞〉を舞う。その間に②③④の順に橋に 縦一列に並び、左膝をついて跪き、待つ。
音楽なし	①は舞い終わると鉦を舞台前方に置いた あと右足左足を廻し、舞台向って左手前 に、中央を向き左膝をついて跪く。②③④ も同様の所作のあと跪く。[A]の配置(鉦 は舞い終わるまで舞台上にある)	音楽なし	①は舞い終わると鉦を舞台前方に置いた あと右足左足を廻し、舞台向って左手前 に、中央を向き左膝をついて跪く。②③④ も同様の所作のあと跪く。[A]の配置(後 見が登場して鉦を楽屋に下げる)
J2	[A]の配置で舞人4人は立ち上がり、J2の 演奏が始まると〈徒手の舞〉を舞い始める。	Hi2	[A]の配置で舞人4人は肩を左右に数回揺 らしたのち、立ち上がり、Hi2の唱歌を歌い ながら〈徒手の舞〉を舞い始める。
J3-1	[A]→[C]→[D]	Hi3-1	[A]→[C]→[D]→[A]
-2	[D]→[A]	-2	[A]→[C]→[D]
-3	[A]→[C]→[D]	-3	[D]→[A]
-4	[D]→[A]→[C]→[A]	-4	[C]→[D]
		-5	[D]→[A]
-5	[A]→[C]→[D]→[A]→[C]→[G1] 2回目 の[C]で全員太刀を抜き、左回りに回る。 J3-19まで〈抜剣の舞〉	-6	[B]→[A]→[E]→[C]→[E]→[C] 1回目の [E]で全員太刀を抜く。 Hi3-23まで〈抜剣の舞〉
-6	[G1]→[H1]→[G2]	-7	[E]→[C]→[A]→[B]→[A]→[G1] 左回りに回る
-7	[G2]→[H2]→[G3]→[H3]	-8	[G1]→[H1]→[G2]
-8	[H3]→[G4]→[H4]	-9	[H2]→[G3]→[H3]→[G4]→[H4]
-9	[H4]→[G1]→[C]元の位置に戻る	-10	[G1]→[E]→[C]→[B]→[A]→[C]→[A] 元の位置に戻る
-10	[C]	-11	[C]→[A]→[C]→[A]→[C]→[A]→[B]→[A]
-11	[C]	-12	[B']→[D']→[F']→[D']→[F']→[D]
-12	[C]	-13	[D]→[B]→[D]→[B]→[D]→[B]→[D]→[B]
-13	[A]→[D]→[A]→[D]	-14	[D]→[E]→[C]→[E]→[C]
-14	[D]	-15	[E]→[B]→[C]→[B]→[A]
-15	[D]	-16	[A]→[B]→[E]→[A]→[B]→[E]→[B'] →[E']→[C']

名取熊野神社舞楽（2006年の調査にもとづく）		白山神社舞楽（2000年のDVDにもとづく）	
音楽	舞人（4人）の配置と所作	音楽	舞人（4人）の配置と所作
N1 1～7、8	N1の旋律が7回反復され、8回目はN1の冒頭の4拍とN2の旋律の最後の8拍が奏される。音楽と舞の動きは、拍節的ではない。その間に①から⑥までの舞人が両手を腰に橋を通して順に舞台上に登場。全員舞台中央で2回拝礼、右左右左と4回体を動かし、その定置につく。①は舞台に向かって右前、②は左前に、中央を向いて左膝をついて座る。③は①の隣に、④は②の隣に、⑤は③の隣に、⑥は④の隣に座る。[A'] → 全員正面を向いて、左手・左足、右手・右足、左手・左足と上にあげながら立ち上がったあと、ふたたび向き合う。[A']	Ha1-1	①が一人先に立ち、両手を腰に当て登場、正面まで両足をそろえて跳躍しながら進み、腕を大きく廻して拍手を1回打ってから、もう一度腕を大きく廻したのち、①の所定地（左奥）に左膝をつき中央を向いて跪く。
		-2	②が①と同じ所作、そのあと、②の所定地（カメラ位置から見ると右奥）に左膝をつき中央を向いて跪く。
		-3	③が①と同じ所作、そのあと、③の所定地（カメラ位置から見ると左手前）に左膝をつき中央を向いて跪く。
		-4	④が①と同じ所作、そのあと、④の所定地（カメラ位置から見ると右手前）に左膝をつき中央を向いて跪く。[A']
N2-1	[A'] N2-6まで <u>〈徒手の舞〉</u>	Ha2-1	[A'] Ha2-5まで <u>〈徒手の舞〉</u>
-2	[A']	-2	[A']
-3	[A']	-3	[A']
-4	[A']	-4	[A']
-5	[A']		
-6	[A'] 前半は中央に寄ったまま、後半元の位置にもどり、太刀を抜く。N2-20まで <u>〈抜剣の舞〉</u>	-5	[A'] 両手を上に3回上げたあと、全員左膝をついてその場に跪き、 <u>太刀を抜く</u> 。Ha-15まで <u>〈抜剣の舞〉</u>
-7	[A']	-6	[A']
-8	[A']	-7	[A']
-9	[A']	-8	[A']
-10	[A']		
-11	[A']		
-12	[A']		
-13	[A'] 太刀を左手に持ち替え、右手で太刀の刃を支えながら右に向けて2回突く動作をし、3回目で <u>左回り</u> で半周回る。→ [A'] (⑥が①、⑤が②の場所に移動)	-9	[A'] 抜いた太刀を両手でもち3回持ち上げ、後半は全員中心を向き、太刀を合わせながら <u>右回り</u> に回る。 後半 [G'1] → [H'1] → [I'2] → [G'2]
-14	[A]	-10	前半 [G'2] → 後半 [H'2] → [G'3] → [H'3] → [I'4] → [G'4]
-15	[A]	-11	前半 [G'4] → 後半 [H'4] → [G'1] → [H'1] → [A]
-16	[A]	-12	前半 [A'] → 後半 [G'1] → [H'1] → [I'2] → [G'2]



-16	[D]	-17	[C']→[E']→[C']→[A']→[B']→[C']→[A']
-17	[A]→[C]	-18	[C']→[A']→[C']→[A']→[C']→[A']→[B']→[A']
-18	[C]→[B]	-19	[B']→[D']→[F']→[D']→[F']→[D']→[F']→[D']
		-20	[D']→[B']→[D']→[B']→[D']→[B']→[D]→[B']
		-21	[D']→[E']→[C']→[E']→[C']→[E']→[C']
		-22	[E']→[B']→[C']→[B']→[A']
-19	[A]→[D]→[C]→[E]→[C]→[E]→[B]→[C] [E][E][C']の3カ所で大きな音を立てながら太刀を上向きに左膝をつき跪く。2回目の[E]のあと立ち上がるときに①と②、③と④が左右入れ替わる。	-23	[A']→[B']→[E']→[A']→[B']→[E']→[B]→[A] [E']の2カ所で大きな音をたてながら左膝をつき跪く。最後の[A]で再び左膝で跪き、太刀を床の上に立てて「中休み」となる。Hi3の唱歌は半分で終わる。
音楽なし	[C']で跪いたまま太刀を全員納め、[A']に移動。①は立上がり本殿に向かって一礼したあと、後ろ向きになり舞台後方で、後ろ向きのまま待つ。次に②も本殿に一礼し、舞台中央で後ろ向きのまま待つ。③④の順で同じように本殿に一礼したあと、③は②の右横に④は②の左横に並ぶ。	音楽なし	[A]で跪いたまま、太刀を全員納める。まず①が立上がり後ろ向きになって足を大きく踏み鳴らしながら舞台を進み、橋の中央で後ろ向きのまま待つ。次に②が舞台の中央に、③と④は同時に、③は②の右横に④は②の左横に並ぶ。
J2	J2のあいだ、舞人4人は立ったまま太刀に右手を掛けて待つ。	Hi2	Hi2のあいだ、舞人4人は立ったまま太刀に右手を掛けて待つ。
J3-1	①が前方、②～④が後方に横に並んだ態勢で、J3が始まると4人同時に太刀を抜き、太刀を右手にもちながら舞う。	Hi3-1	①が前方、②～④が後方に横に並んだ態勢で、Hi3が始まると4人同時に太刀を抜き、太刀を右手にもちながら舞う。
-2	最初は太刀を右手にもち、途中から太刀を左手で添えて胸の前に水平にして舞う。足は高く上げたり、まわしたりする。	-2	太刀を右手にもち左手でそえ胸の前に水平にして舞うが、向きをかえるとき、足を大きく踏み鳴らし音を立てる。
-3	太刀を左手で支え、腕を伸ばして体の前に構えて舞う。最後の旋律で全員右手の太刀を高く上げしばらく待つ。最後の音で左膝をついて跪く。		
-4	太刀を逆手で左手右手ともちかえ、右膝左膝と跪く足も変えながら〈刀返し舞〉を舞う。J3のフレーズ4分の1のところで左膝をつき、右手にもった太刀を上へ上げたまままで舞い終わる。	-3	左膝をついて跪き、「はい」という掛け声とともに太刀を逆手で左手右手ともちかえ、右膝左膝と跪く足も変えながら〈刀返し舞〉を舞う。Hi3の中間で唱歌と音楽、舞が終了。太刀は右肩の上。
音楽なし	退場 ①から順に立上がり、右手にもった太刀を上へ上げたまま、足を高く上げ、足音を立てながら退場。	音楽なし	退場 ①から順に立ち上がり、太刀を右肩に乗せたまま太刀を左右に揺らしながら、足音を立てて退場。



-17	[A]	-13	前半 [G'2] → 後半 [H'2] → [G'3] → [H'3] → [I'4] → [G'4]
-18	[A]	-14	前半 [G'4] → 後半 [H'4] → [G'1] → [H'1] → [A']
-19	[A]		
-20	[A] 太刀を左手にもち替え、右手で太刀の刃先を支えながら右に向けて2回突く動作をし、3回目で左回りで半周廻り、最初の隊形に戻り、 <u>太刀を全員納める</u> 。 [A']	-15	[A'] 前半は手を3回上に上げ、後半左ひざをついて跪き <u>太刀を全員納める</u> 。 [A']
N11-12	N1の旋律が12回反復される中、⑥～①の順で一人ずつ退場。登場の時と同じ動作。横向きから舞台中央正面で、2拝礼、後ろ向きになり、橋を渡って退場。右・左と体の向きを変えながら橋を通る。N1の旋律の反復10回目で、①が退場の動作を始める。後ろ向きになって橋を渡る前に、太刀を抜き、舞台の上方に張ってある注連縄を切り落とす。ここではじめて太刀が真剣であったことが分かる。そのあと、橋を渡り退場。	Ha1-1	①のみ立ち上がり、舞台中央へ進み、最初と同じ所作をし、後ろ向きになり退場。
		-2	②が立ち上がり、①と同じ所作のあと、後ろ向きになり、退場
		-3	③が立ち上がり、①と同じ所作のあと、後ろ向きになり、退場
		-4	④が立ち上がり、①と同じ所作のあと、後ろ向きになり、退場

表の凡例：音楽欄の記号は譜例に対応する。ハイフン後の数字は繰り返しの回数。

舞人欄の記号は表2のA～Iに対応する。

イタリックと下線で示した部分は、四地で共通する項目、あるいは対応する項目を示す。

灰色の部分は四地の共通項をそろえるために生じた空欄である。

(加納マリ作表)

# 太平楽 譜例

慈恩寺

J1

J2

J3

平塩神社

Hi1

Hi2

Hi3

名取神社

N1

N2

白山神社

Ha1

Ha2

The image displays musical notation for various instruments and rhythms across different locations. It includes staves for flute (笛), drum (太鼓), and voice (声). The notation includes notes, rests, and dynamic markings like 'accel'. Some staves have lyrics in Japanese. The locations listed are 慈恩寺 (J1, J2, J3), 平塩神社 (Hi1, Hi2, Hi3), 名取神社 (N1, N2), and 白山神社 (Ha1, Ha2). The notation is in Western staff notation with various time signatures and note values.

## 凡例

- ・慈恩寺は2016年5月、平塩神社は2016年3・4月、名取神社は2006年4月に筆者がそれぞれ収録したもの、「白山神社」は東北歴史博物館が収録したDVDをもとに採譜した。
- ・音高、リズムを見やすくするために、細かい音の揺れやリズムの伸び縮みは表記しない。
- ・五線譜は龍笛（あるいは声）の旋律、慈恩寺と平塩神社のリズム譜は上側が鉦、下側は太鼓のリズムを、名取神社と白山神社のリズム譜は太鼓のみで、右は右手のバチ、左は左手のバチで打つことを表記。
- ・*accel* は、笛や太鼓が次第に早くなることを示す。
- ・×→太鼓の縁を演奏、笛の音は実音。唱歌の音は見やすくするため、1オクターヴ高い表記にした。
- ・平塩神社では唱歌と同じ旋律を声より2オクターヴ高い音で笛が演奏するがスペースの関係で省略。

## **Bugaku in the local areas (4)**

### **“Taiheiraku” in the Tohoku area**

**Mari KANO**

I have previously written in the ‘Bulletin’ about “Renge-E Mai” at Oki Kokubunji Temple in Shimane Prefecture, “Hayashi family Bugaku” at Yachi Hachiman Shrine in Kahoku-cho as well as at Jionji Temple and “Hirashio Bugaku” in Sagae City, Yamagata Prefecture (2004, 2006, 2008). In this short paper I will describe Bugaku “Taiheiraku” in the Tohoku area.

“Taiheiraku” is one of the famous Bugaku (court Music with Dance) that has been performed in the court for various occasions since the Heian period. “Taiheiraku” is said to be the dance in which Tang (ancient Chinese) commanders performed in soldier- style costumes, holding pikes and swords. “Taiheiraku” was introduced from Tang to Japan, but it is not known when “Taiheiraku” was started, when it was transported to Japan, nor who composed it. Since the Heian period there have been many descriptions about “Taiheiraku” in historical materials on Gagaku (Gakusho) and in literary works such as “Makura-no-sōshi”, “Genji-monogatari”. Now Bugaku “Taiheiraku” is performed in the Kunaicho Gakubu (the Imperial Household Agency) at the enthronement ceremony of the Emperor and also in Osaka Shitennoji Temple at “Shō-ryō-e” (Shōtokutaishi’ memorial) every year.

On the other hand, “Taiheiraku” is also performed in various regions of Japan ; temples and shrines of Yamagata, Miyagi, Niigata, Toyama, Shizuoka, and Shimane Prefectures. But these “Taiheiraku” are different from those of the Kunaicho Gakubu in many points such as music, style of dance and costumes.

Bugaku in the Tohoku area is assumed to have had its origin in the Heian era after the construction of Yamadera Temple (Risshakuji Temple), though the origin and the history of many of the Bugaku which have been handed down to the provinces are not known. In the early days of the Edo period it was recorded that “the Hayashi family has been involved in Bugaku of Yamadera Temple, Jionji Temple, Hirashio Shrine, and Yachi Hachiman Shrine”. It perhaps means that Bugaku was dedicated by the Hayashi family in these four places at the beginning of the Edo period. But in the 18th century the Hayashi family didn’t rule Hirashio Shrine. Then Hirashio Bugaku became independent of the Hayashi family, and “Taiheiraku” as the legend and the dedication have been done by the local people. Since the Meiji period the Hayashi family has hardly ever performed Bugaku at Yamadera Temple. In Miyagi Prefecture at Natori Kumano Shrine “Taiheiraku” is still performed and at Sendai Hakusan Shrine it had been performed until 2000. In this paper I have chosen “Taiheiraku” of four places in the Tohoku area: Jionji Temple (Sagae City), Hirashio Shrine (Sagae City), Natori Kumano Shrine (Natori City) and Sendai Hakusan Shrine (Sendai City).

At Jionji Temple and Yachi Hachiman Shrine, the Hayashi family has persisted in the traditional method of transmission from father to son. Because the dancers of “Taiheiraku” are four adult men, the Hayashi family doesn’t perform “Taiheiraku”. Therefore at Jionji Temple and Yachi Hachiman Shrine, the Buddhist priests of Jionji Temple are responsible for performing “Taiheiraku”. I think in the Edo period at Yamadera Temple, the

Buddhist priests there performed “Taiheiraku”.

In the Tohoku area four adult male dancers perform “Taiheiraku” in costumes of Kabuto and Yoroi (Japanese armor) with pikes and swords. Except for the Tohoku area, four boys dance in Japanese long-sleeved Kimonos and Hakamas with Torikabutos(headpieces), consequently these “Taiheiraku” are “Chigo-mai”. Also in the Imperial Household Agency and Shiten-noji Temple, four adult male dancers perform with costumes of the Tang soldier style, holding pikes and swords.

Comparison of “Taiheiraku” in the four places of the Tohoku area shows that the structure of “Taiheiraku” is similar; the appearance of dancers, the dance performance, the exit of the dancers. Each of the dances at the four places has the same names “Hoko-no-Mai” (Dance with pikes), “Toshu-no-Mai” (Dance with bare hands), “Bakken-no-Mai” (Dance with drawing swords), and “Katana-gaeshi-no-Mai” (Dance with swords upside down). Moreover, some of the movements of “Taiheiraku” in the four places are similar. That is very interesting. But the music of “Taiheiraku” in the Tohoku area is different and the styles of each dance vary in the four places. Except for the music and the costumes, “Taiheiraku” in the Tohoku area and the Imperial Household Agency have something in common. In the future, I will attempt comparisons among the various “Taiheiraku” throughout Japan.

## 地方の舞楽 (4)

### 東北地方に伝承される《太平楽》

#### 加納マリ

日本各地に伝承される舞楽について、筆者はこれまでに島根県隠岐島の蓮華会舞<sup>れんげ えまい</sup>、山形県の谷地八幡神社と慈恩寺の林家舞楽<sup>じおんじ はやしけ ぶがく ひらしお</sup>、平塩舞楽を取り上げ、それぞれの概要を示した。今回は、日本各地に伝承される舞楽のなかで、特に東北地方の《太平楽》を取り上げる。

《太平楽》は平安時代以降、宮廷においてさまざまな機会に舞われてきた舞楽の一つであり、唐時代の舞楽が日本に伝来したと言われているが、その作曲者、作曲年代、作曲された場所などはわかっていない。しかし、平安時代以降に書かれた多くの楽書<sup>がくしょ</sup>（雅楽に関する文献）や平安時代の文学作品（『枕草子』、『源氏物語』など）には《太平楽》に関する記述があり、それが宮内庁楽部や大阪四天王寺の現行曲に至るものと考えられる。近年、宮内庁楽部では《太平楽》は天皇の即位式に際して、四天王寺では毎年、聖霊会<sup>しょうりょうえ</sup>（聖徳太子の命日に行われる法要）で舞われている。

一方、山形県、宮城県、新潟県、富山県、静岡県、島根県など、日本各地の寺社にも《太平楽》が伝承されている。それは宮内庁楽部の現行の《太平楽》とは音楽、舞の様式、装束などさまざまな点で異なる。今回取り上げる山形県谷地八幡神社、慈恩寺、平塩熊野神社、宮城県名取熊野神社など東北地方に伝承される《太平楽》は、いずれも山形県の山寺<sup>やまでら りっしやくじ</sup>（立石寺）にその起源をもつといわれ、戦国時代の鎧兜を身に付けた武将の姿で舞うところが全国的に見ても珍しく、興味深い。この小論は山寺にその起源があるとされる山形県や宮城県の現行の《太平楽》を音楽や舞から比較分析し、その結果から東北地方に伝承される《太平楽》の特徴をまとめたものである。

東北に伝承する舞楽は平安時代に建立された山寺を起源とするといわれているが、その詳しい歴史等についてはわかっていない。江戸時代初期までは林家が山形県の山寺、慈恩寺、谷地八幡神社、平塩神社に出仕して、舞楽を司ったと記録されるが、平塩神社だけが江戸初期に林家の手を離れ、神社の氏子によって現在まで舞楽が伝承されてきたという。山寺では明治以降、舞楽の定期的な奉納は行われていない。宮城県では名取熊野神社で現在も舞楽が行われており、2000年までは仙台白山神社でも行われていた。そこで、今回は慈恩寺（谷地八幡神社）、平塩神社、名取熊野神社、白山神社の4カ所の《太平楽》について比較検討した。

林家が携わっている林家舞楽では代々「一子相伝」の伝承を固守してきたため、現在でも一人舞を中心に行っている。今回取り上げる《太平楽》は四人で舞うため、慈恩寺においても谷地八幡神社においても舞を担っているのは慈恩寺の山衆<sup>いっさんしゅう</sup>（僧侶たち）であり、かつては山寺でも僧侶たちが舞っていたものと推察される。

慈恩寺、平塩神社、名取熊野神社、白山神社の4カ所の《太平楽》は、前述したように大人の男性の舞人（四人あるいは六人）が戦国時代の鎧兜を身に付け、鉾と太刀を手に持って舞う勇壮な舞である。東北以外の地方では小学生の男児が振袖の着物に鳥兜を被って舞う可憐な稚児舞であり、宮内庁楽部や四天王寺では唐時代の武将の姿、赤や金色の華やかな色合いの装束と多くの武具をつけて舞う武舞<sup>ぶのまい</sup>で、舞人の年齢、装束において大きな相違がみられる。



東北地方の4カ所の《太平楽》の比較から、大人の男性が戦国時代の鎧兜で舞うこと、舞楽の構成がいずれも、舞人の登場⇒舞楽そのもの⇒舞人の退場であること、舞楽のなかに〈鉦の舞〉〈徒手の舞〉〈抜剣の舞〉〈刀返しの舞〉という名の舞があること、舞の所作の中に左膝を付く動作があることなど、共通点が見られる。しかし、音楽や舞の型はかなり相違があることもわかり、山寺を起源とするとはいえ、その伝承過程にはまだ解明すべき問題が残っている。音楽や装束のことを除けば、宮内庁楽部の現行の《太平楽》と類似している点もあり、今後、すべての《太平楽》との比較検討を課題としたい。